

白石町文化財調査報告書第7集

つま やま
妻山古墳群 4 号墳

平成6年3月

佐賀県白石町教育委員会



白石町文化財調査報告書第7集

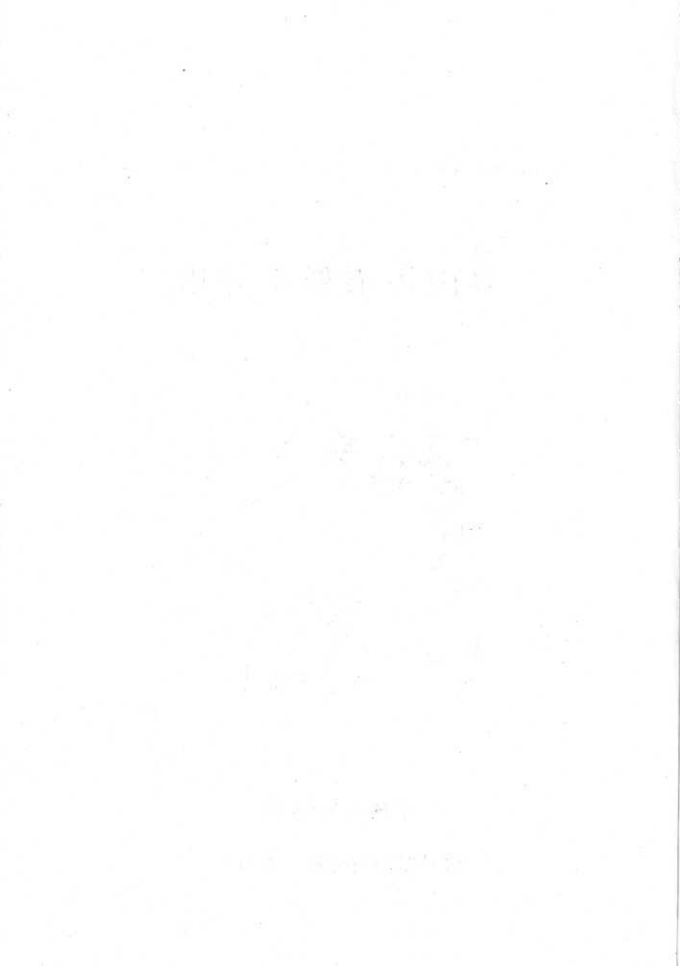
つまやま
妻山古墳群4号墳

白石町位置図



平成6年3月

佐賀県白石町教育委員会



序

本書は、町道歌垣線離合帯造成工事に伴って、平成5年度に実施した妻山古墳群4号墳の発掘調査報告書です。

当初は記録保存ということで調査を進めてまいりましたが、石室内に多種多様な線刻画を有することが明らかになり、貴重な古墳であることが判明しました。

4号墳のような線刻画を有する古墳は、白石町の他に有明町・北方町・多久市・小城町といった佐賀県西部に集中していますが、その中でも4号墳の線刻画は内容・規模ともに非常に優れたものであります。

今回の調査結果は、白石町の古墳時代の文化を明らかにするのみならず、佐賀県西部の線刻画を有する文化圏の解明にも、貴重な資料になると思われます。今後とも関係機関と協議を重ね、現状保存の方で検討していきたいと考えております。

この報告書が、文化財に対する認識と理解を深め、啓蒙の一助となれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、調査を実施するにあたりまして、多大のご指導とご協力を賜りました関係各機関並びに地元の方々に対しまして、厚くお礼の言葉を申し上げます。

平成6年3月

佐賀県白石町教育委員会
教育長 吉 田 忠

例 言

1. 本書は、町道歌垣線難合帯造成工事に伴い平成5年度に実施した妻山古墳群4号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は白石町教育委員会が実施した。
3. 墳丘・葦石平面実測は有限会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、それ以外の実測については調査員が実施した。
4. 古墳・遺物の写真撮影、遺物の実測、製図は調査員が実施し、出土遺物の洗浄・復元は整理作業員が実施した。
5. 調査においては、佐賀県教育委員会文化財課のご支援・ご協力を受けた。
6. 本書の執筆・編集は、渡部俊哉が行った。

凡 例

1. 挿図中に用いた方位は磁北を示す。
2. 遺物実測図中において、須恵器は断面を黒く塗りつぶした。
3. 図版の遺物写真は、挿図と対照できるように（ ）内に挿図番号と挿図内遺物番号を併記した。

本 文 目 次

I. 序説	1
1. 調査に至る経緯並びに経過	1
2. 調査体制	1
II. 歴史的環境と古墳の位置及び現況	2
1. 歴史的環境	2
2. 古墳の位置及び現況	2
III. 調査の記録	6
1. トレンチ調査	6
2. 内部主体	7
3. 線刻画	12
4. 墳丘及び葦石	17
5. 出土遺物	21
IV. まとめ	24

挿 図 目 次

Fig. 1	町内主要遺跡分布図	3
Fig. 2	地形実測図 (1/100)	4
Fig. 3	東西・南北土層断面図 (1/40)	6
Fig. 4	玄室上面・羨道実測図 (1/40)	7
Fig. 5	石室実測図 (1/40)	9~10
Fig. 6	奥壁線刻画(1) (1/6)	12
Fig. 7	奥壁線刻画(2) (1/6)	13
Fig. 8	玄室東側壁線刻画(1) (1/6)	14
Fig. 9	玄室東側壁線刻画(2) (1/6)	15
Fig. 10	玄室西側壁線刻画(1) (1/6)	16
Fig. 11	玄室西側壁線刻画(2)・羨道東側壁線刻画 (1/6)	18
Fig. 12	墳丘・葺石実測図 (1/60)	19~20
Fig. 13	出土遺物実測図(1) (1/4)	21
Fig. 14	出土遺物実測図(2) (1/2)	22
Fig. 15	出土遺物実測図(3) (1/2)	23
Fig. 16	銅銭拓本 (1/1)	24

図 版 目 次

P.L. 1	1. 古墳位置 (犬山岳より)	2. 墳丘東側 (調査前)	3. 墳丘西側 (調査前)
P.L. 2	1. 墳丘全景 (北より)	2~3. 墳丘東側葺石	
P.L. 3	1~2. 墳丘東側葺石	3. 墳丘北東側葺石	
P.L. 4	1~3. 墳丘西側葺石		
P.L. 5	1. 墳丘西側葺石	2. 墳丘北側岩盤 (南より)	
	3. 墳丘北側岩盤 (西より)		
P.L. 6	1. 石室上面 (北より)	2. 奥壁 (南より)	3. 屍床 (南より)
P.L. 7	1. 敷石 (南より)	2. 玄門上部 (玄室より)	
	3. 玄門下部 (玄室より)		
P.L. 8	1~2. 玄室東側壁	3. 玄室西側壁	
P.L. 9	1. 玄室西側壁	2. 羨道 (北より)	3. 玄門板石 (南より)

- | | | |
|---------|---|----------------------|
| P L. 10 | 1. 羨道東側壁（西より）
3. 高坏・提瓶出土状況（東より） | 2. 填丘南東裾器台片出土状況（東より） |
| P L. 11 | 1. 鉄刀片 2 本出土状況（東より）
3. 碧玉製管玉・勾玉・耳環出土状況（南より） | 2. 銅劍出土状況（南より） |
| P L. 12 | 1. 金銅装太刀柄頭出土状況（南より）
2. 金銅装太刀片出土状況（南より）
3. 金銅装太刀片（鐔部）出土状況（北より） | |
| P L. 13 | 1. 奥壁東側上位線刻画
3. 奥壁西側上位線刻画 | 2. 奥壁東側中位線刻画 |
| P L. 14 | 1. 奥壁西側中下位線刻画
3. 玄室東側壁北腰石線刻画 | 2. 玄室東側壁北腰石線刻画 |
| P L. 15 | 1～3. 玄室東側壁北腰石線刻画 | |
| P L. 16 | 1. 玄室東側壁中腰石線刻画
3. 玄室東側壁南端三段目線刻画 | 2. 玄室東側壁南端二段目線刻画 |
| P L. 17 | 1. 玄室西側壁北腰石線刻画 | 2～3. 玄室西側壁南腰石線刻画 |
| P L. 18 | 1. 玄室西側壁北腰石上部石線刻画
3. 羨道東側壁北線刻画 | 2. 玄室西側壁南端三段目線刻画 |
| P L. 19 | 1. 羨道東側壁南線刻画 | 2～5. 出土遺物(1) |
| P L. 20 | 1～12. 出土遺物(2) | |

I. 序 説

1. 調査に至る経緯並びに経過

白石町建設課より、平成5年度工事として町道歌垣線の一部に離合帯を造成する計画を4月当初に知らされた。ところが当該工事予定地が泰山古墳群の中に含まれることから、4月9日建設課職員と共に現地を踏査し、その結果古墳1基を確認した。泰山古墳群については、現在確認されているのは7基であり、今回調査を実施した古墳を4号墳と命名した。

古墳の取扱いについては、現地で確認した段階では大井石が欠損し、羨道部分も既存道路で削られていることから、記録保存することにし、9月24日から白石町教育委員会により発掘調査を開始した。

調査の進行するなかで、墳丘上面は削平されているものの、墳丘東西斜面に墓石が比較的良好に残存しており、かつ玄室奥壁・東西側壁・羨道東側壁に格子・斜格子・人物・ゴンドラ型船等の線刻が良好な状態で検出された。

この旨を佐賀県教育委員会文化財課に連絡し、現地を見て頂いたところ「全面保存が望ましい」とのアドバイスを受けた。12月7日、白石町建設課・白石町社会教育課・佐賀県文化財課の三者による会議を開催し、古墳の取扱いについて協議を行い、その結果平成5年度には当該工事を行わず、また離合帯については平成6年度に別の場所を造成することとなり、古墳の保存の方向である程度意見がまとまった。

古墳の取扱いについては、今後も関係機関と協議を重ねつつ、保存整備の方向で進めていく予定である。

2. 調査体制

調査主体	白石町教育委員会
事務局	教 育 長 吉 田 忠 社会教育課長 東 島 留 司 社会教育係長 石 橋 芳 春
調査員	社会教育課主事 渡 部 俊 哉
発掘作業員	川崎英亮・永尾秋子・中村幸枝・本告キクエ・狭野キクヨ
整理作業員	稲富敬子・洲上房枝・田中順子・山口登美子・副島武子・江山幸子・溝口京子
調査協力	地元各位・白石町建設課・白石町企画開発課・中溝俊一

II. 歴史的環境と古墳の位置及び現況

1. 歴史的環境 (Fig. 1)

白石平野と呼ばれる平坦地が大半を占める白石町においては、遺跡の存在は西部の杵島山系東麓に集中する傾向にある。これは、白石平野東部の大部分が江戸時代以降の干拓工事によるためである。

昭和62年度からの農業基盤整備事業に伴う発掘調査の結果、白石町の古代の様相が次第に明らかになった。縄文時代については、船野遺跡において晩期の土器等が少数検出されたのみであり、不明な部分が多い。本格的な集落が営まれるのは、弥生時代中期からで船野遺跡が出現する^①。当地方の軟弱地盤に対する地盤沈下対策としての礎石・横木等を施した掘立柱建物が確認されている。引き続き後期の湯崎東遺跡においても同様の工法が見られる^②。当時の墓制を示すものに、妻山丘陵を東側に登る町道造成工事中に見えられた甕棺・箱式石棺・石蓋土墳墓がある^③。

古墳時代には、湯崎東遺跡が全般を通じて営まれ、後期を中心として久治遺跡・多田遺跡^④が出現する。中期の古墳としては、妻山古墳群3号墳が西側に開口する偏平な割石積みを施した初期の横穴式石室の形態を示し、5世紀代と考えられる。このほかにも同時期の古墳が杵島山系に存在するようであるが、詳細は不明である。後期の古墳としては、船野山丘陵尾根東端に5世紀末から6世紀初頭の径約40mの円墳である船野山古墳群1号墳（通称、かぶと塚—白石町史跡）がまず挙げられ、続いて6世紀前半の円筒埴輪・須恵器をもつ全長約70mの前方後円墳である道祖谷古墳が造営される^⑤。正確な時期は不明であるが、4基の小円墳を含む全長約40mの前方後円墳である湯崎古墳群が6世紀代に造営される^⑥。後期の群集墳は杵島山各支脈に多数造営されているが、大半は消滅し当時の姿を留めるものは、野柄古墳群1号墳（白石町史跡）等少数である。

2. 古墳の位置及び現況 (Fig. 2)

妻山古墳群は、杵島山系中の標高191.5mを測る山から東へ延びる丘陵尾根上の東西約700mの範囲に存在する。

4号墳は、妻山古墳群のほぼ西端に位置し、標高約64～67mを測る。南に開口する横穴式石室の羨道部分は、昭和37年の町道造成工事の際に削平され、道路との比高差約5mを測る急峻な崖状を呈している。4号墳周辺は、昭和47年からの構造改善事業によるみかん園造成のため4～5段の段々畑となるなど、大きく改変を受けている。

調査前の現況は、墳頂部については東西約8m、南北約6mの平坦状を示し、削平を受けていることが推定された。墳丘東側は2m以上の比高差が見られ、残存状態は良好と思われた。西側については50cm程度の段をもって西側の平坦部分に連なっていた。



Fig. 1 町内主要遺跡分布図

玄室については、内部に小礫が多数落ち込んでおり、東西側壁上部が少し窺える状態であった。^⑧この小礫を除去したところ、奥壁に懸かる天井石1枚のみが残存し、その外は内部に落下していた。わずかに残る天井石も南側へ大きく傾いており危険でもあったために、調査途中で除去した。

全体的に見ると、墳丘東側で等高線が平円状にまわり、南側については羨道部が削平されており、東西長約12m前後の円墳と考えられた。

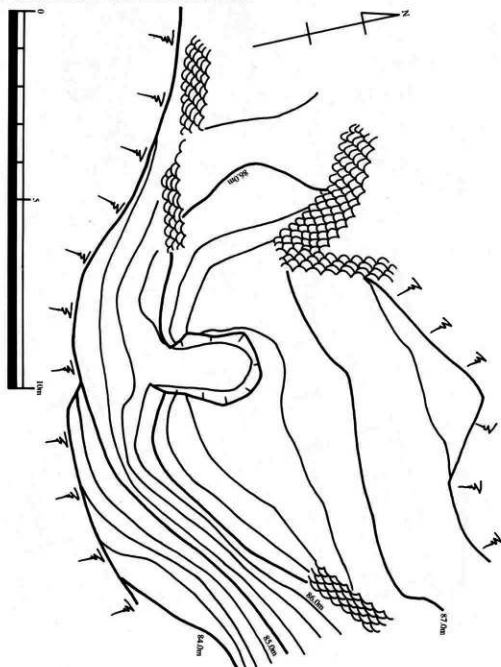


Fig. 2 地形実測図 (S=1/100)

(註)

- ①佐賀県教育委員会『佐賀県農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書』10 1992年3月
- ②佐賀県教育委員会『佐賀県農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書』7 1989年3月
佐賀県教育委員会『佐賀県農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書』8 1990年3月
佐賀県教育委員会『佐賀県農業基盤整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書』9 1991年3月
- ③『新郷土』佐賀県文化館 昭和37年
- ④白石町教育委員会『多田遺跡-E・F・G・H・I・J・地区』平成3年3月
白石町教育委員会『多田遺跡-A・B・C・D・地区-』平成4年3月
- ⑤蒲原宏行・本田秀樹「佐賀・長崎の円墳」(『古代学研究』123 古代学研究会 1990年)
- ⑥平成5年度に日本三大歌垣跡の一つとされる杵島山歌垣跡での造成工事に伴う確認調査を実施した結果、円筒埴輪片等が出土し、また前方部端の列石が確認された。平成6年度に再度確認調査を実施する予定である。
- ⑦『前方後円墳集成』九州編 山川出版社 1992年
- ⑧所有者の話によると、開墾当時に出てきた小礫を玄室内部に落としたということである。また、当時既に天井石は内部に落下していたそうである。

III 調査の記録

1. トレンチ調査

墳丘を露出し、堆積土の状況・外部施設の有無を確認するために、玄室北側及び東側にトレンチを設定した。

(1) 東トレンチ (Fig. 3)

墳頂部は、北側から流入したと思われる小礫混じりの暗茶色粘砂質土が最大30cmの厚さで堆積し、トレンチ西端から東端約4mまでは平坦を示すが、そこからは急斜面となり4.4m地点、標高約84.7mで平坦となる。斜面上には約10cmの旧表土(植物腐植土)の上に50~100cmの厚さで暗茶色粘砂質土が堆積している。3.5~4.0m地点で葦石の一部が検出された。葦石は墳丘上に埋設されるかたちで据えられている。

(2) 北トレンチ (Fig. 3)

奥壁北側でも小礫の混在した暗茶色粘砂質土が最大20cmの厚さで、北側斜面から流入している状況が窺えた。2~6の堆積土は全て北側からの流入土である。トレンチ南端から約2.5m地点で東側から西側へ落込む状態の岩盤が露出し、墳丘の盛土もその部分までであり一部が岩盤を覆っている。墳丘を全て露出した段階で判明したことであるが、北側では岩盤をほとんどそのままの状態で造作を加えておらず、葦石及び墳丘の盛土は岩盤南端までしか施していない。

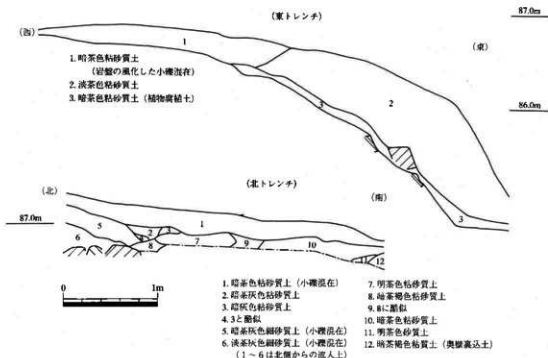


Fig. 3 東西・南北土層断面図 (S=1/40)

当初は墳丘を断ち割る予定であったが、保存の方で事態が進展したために墳丘の盛土については調査を行っておらず、不明な部分が多い。北トレンチにおいては、奥壁裏込土として暗茶褐色粘質土を盛りそれ以北では茶色系の砂質土と粘質土を盛っている。

2. 内部主体 (Fig. 4・5)

(1) 概観

内部主体は、ほぼ南に開口する両袖式の横穴式石室で羨道部分には閉塞石を充填し、玄門を羨道側からの3枚の板石でもって閉塞している。

石室は、奥壁に懸かる天井石1枚が残存していたが、危険のため除去した。他は全て落っていた。

東側壁は中段部分の腰石より上部が落下しており、羨道部分は町道造成の際に削られ、約2.3mしか残存していない。羨道西側壁については、南端部分の崖との境部分に木が群生しているため全てを調査できなかった。

玄室については、東側壁で一部欠損があるものの、壁体の遺存状況は比較的良好である。

墳丘の断ち割り調査を実施していないので、石室の外部状況及び墓壇については全く不明である。

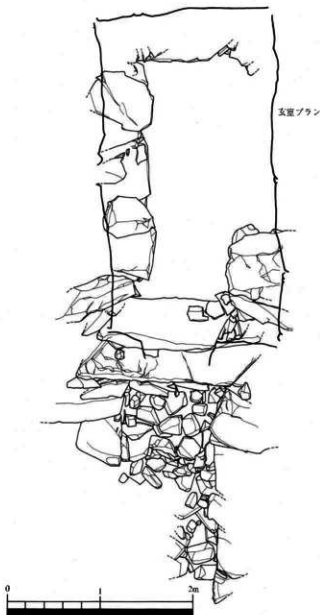


Fig. 4 玄室上面・羨道実測図 (S=1/40)

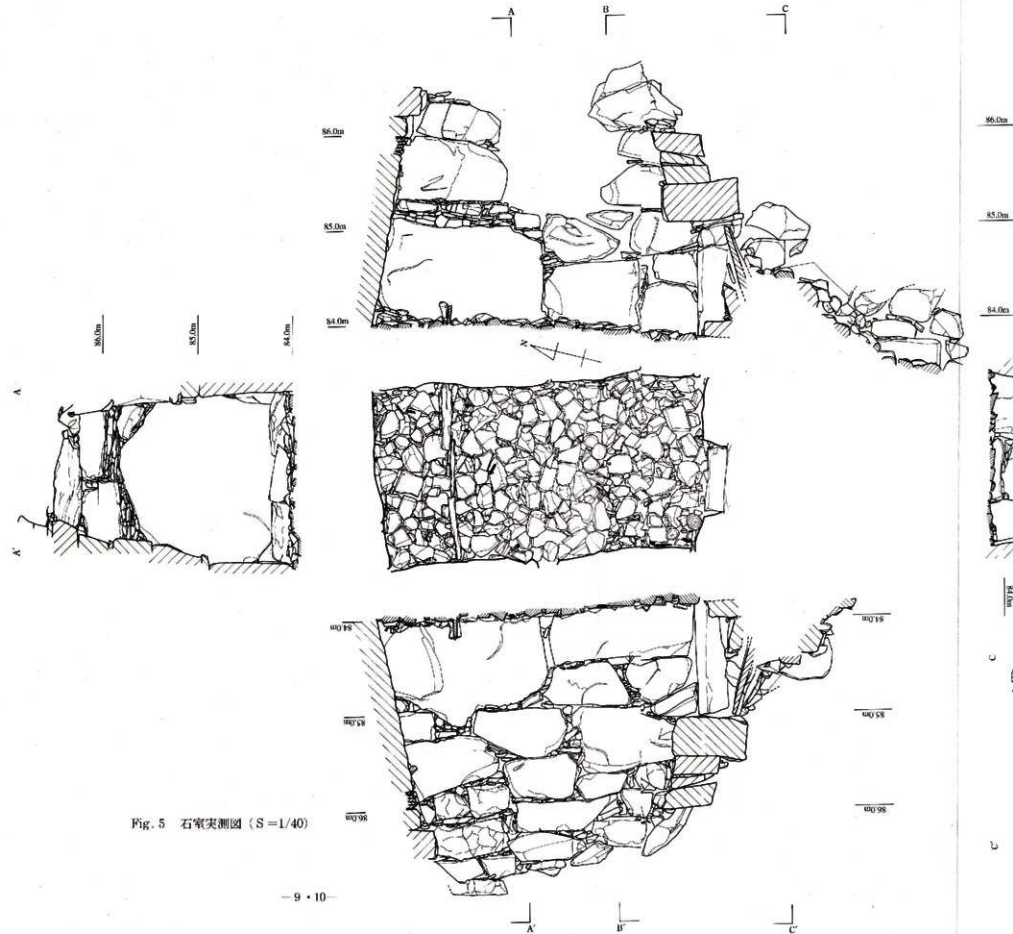


Fig. 5 石室実測図 (S=1/40)

C玄門部

袖石は東西側壁南端に接して玄室側に張り出している。東側は床面からの高90cmの大型石材の上に高さ20cmの中型石材と小型石材を積み、玄室側へ約60cm張り出している。西側は床面からの高さ1.2mの大型石材1枚を縦位置に据え、玄室側へ約30cm張り出している。

袖石間には、高さ20cm、幅65cmの欄石を横位置に置き、その南端に接して幅70cm、高さ40cmの中型の閉塞石を更に置いている。

袖石上部は大型・中型石材5枚を使用して前壁を構築し、玄室側へ35cm張り出している。中段は東側で二段積み、西側で一段積みで隙間に小型割石を充填している。下段の表面はほぼ垂直であるが、中段以上は約15°の持送りを示す。また、下段の大型石材の東端は東袖石と南端を揃え、西端は西袖石から南へ約20cm張出している。

D床 面

床面には全面的に敷石を施し、奥壁から南側70cm地点に3枚の長方形の仕切石を横位置に据えて、屍床を区切っている。仕切石を据えてから敷石を施したものである。敷石は20～30cmの比較的偏平な石を平坦面を上にして使用しているが、表面はかなり凹凸が激しく、乱雑の感をぬぐえない。奥壁から南側約2.1m地点まではほぼ水平を保つが、それ以南は約10cm低くなって玄門部へ至る。東西断面でみると、東側が若干高い。

屍床長は北側で1.85m、南側で1.9m、屍床幅は東側で0.8m、西側で0.75mを測る。

屍床での敷石の敷き方は、それ以外とは大差は認められないが、北東隅部では小型石材を3～4段積みにし高低差が最大25cmある。

遺物の出土状況であるが、全体的に攪乱を受けており副葬当時の状態を保っているのは、南西隅部の高杯・提瓶・鉄刀のみと考えられる。屍床敷石上に12世紀代の土師器皿が置かれていたことから、その時期に盗掘を受けて遺物が玄室内に散乱したのであろう。

(3)羨 道

羨道については、南端が削平されていることや閉塞石を除去していないことなどから、全体の詳細は不明な部分が多い。現存長は東側壁で2.75m、西側壁で1.45m、幅は1.0m前後であろう。玄門下段の大型石材南端と接する天井石1枚が南西側にずれた状態で検出されたことから、東側壁では五段積みであつたろうと推定される。

羨道側から3枚の板石を立て掛けて玄門部を塞いでいる。高さ80cm以上、幅70cm、厚さ10cmの1枚で玄門の空間をほとんど覆うが、南側に接して2枚の板石を立て掛ける。最南端の石は閉塞石の上に置かれるが、他の2枚は下部を閉塞石で隠されている。

閉塞石は10～30cm前後の小型石材を玄門側で約1.1m積み、南側へ階段状に傾斜している。羨道床面は、玄室床面より約40cm低い。

3. 線刻画

4号墳を特徴づける線刻画は、玄室・羨道合わせて11石に施されている。奥壁・玄室東側壁・回西側壁・羨道東側壁の順で記すが、図版は拓本をトレースしたものである。

(1) 奥壁 (Fig. 6・7)

奥壁では東側上・中位、西側中下位に格子紋様を7単位刻む。東側上位では上端に右下がり3本、左下がり3本で斜格子紋様を刻み、長方形の対角線状に右下り4本を刻む。これに接して縦8本、横5本の格子紋様を刻むが、間隔は縦横線とも一定していない。東側に逆台形上の線刻も認められる。中位では縦14本、横12本で格子を刻むが、間隔は縦線で1～4cm、横線で1～4cmと一定していない。

西側中位では縦5ないし8本、横7本で格子紋様を刻む。縦線間隔の1～3cmと狭い西側4本は単位を別にする格子紋様である可能性もある。

西側下位の線刻は、4号墳線刻画の中で最も彫りの深く、紋様も比較的明瞭である。

上中下と3単位の格子紋様が認められるが、線を共有する部分がそれぞれあり、明瞭に区別することは難しい。上部は縦20cm、横25cmの範囲に縦線7本、右上がりの横線6本で形成する。

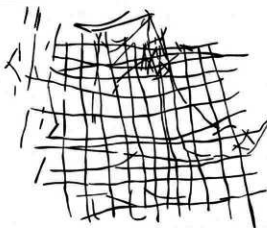
中部は縦45cm、横65cmの範囲に縦線24本、右上がりの横線7ないし8本を刻む。横線の間隔は下位になるほど広くなり、最大8cmを測る。

東端に接して長径5cmの楕円形と3×3cm、3×3cmの方形が刻まれる。

下部は横40cm、縦26cmの範囲に右下りの線6ないし7本、左下が



東側上位



東側中位

Fig. 6 奥壁線刻画(1) (S=1/6)

りの6本で格子紋様を作り、方形の対角線状に右下がりの6本を刻む。

(2)玄室東側壁 (Fig. 8・9)

東側壁では、北端腰石とその南側腰石、南端腰石から二・三段目の石材に線刻画が認められる。

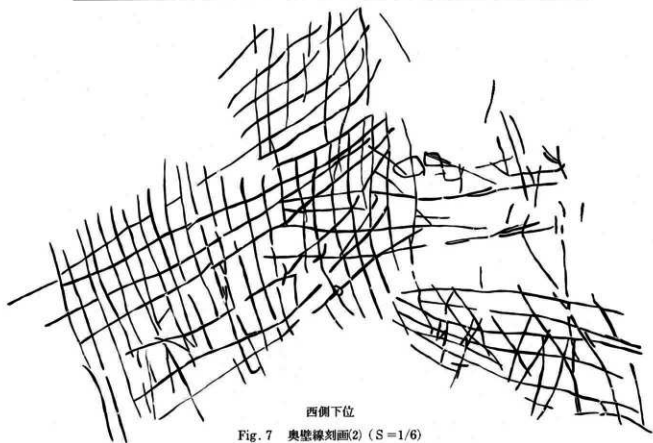
北端腰石上部に縦25cm、横80cmの範囲に格子紋様2単位が刻まれる。

北端の格子紋様は、縦線5本、横線6本で形成され、全体的に右下がりである。

約10cm離れて縦線13本、縦線5本の横長の格子紋様がある。一区画の



西側中位



西側下位

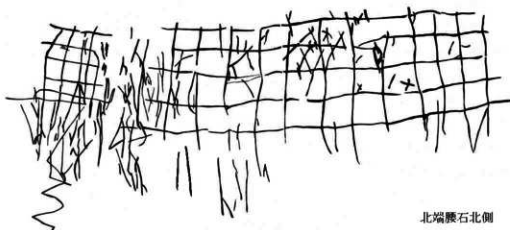
Fig. 7 奥壁線刻画(2) (S=1/6)

法量は縦3～5cm、横4～6cmと比較的揃っている。

この横長の格子紋様の東側に、縦54cm、横60cmの範囲で三段に別れて線刻画が刻まれる。

上段には、両端が垂下した全長約40cmの半円形状紋様がある。縦、右下がりの線を10本程度刻むが、何を表すのかは不明である。

中段には頭部を楕円形、頸・胴体・脚・尾を端的な線で表現した動物が描かれる。脚4本の



北端腰石北側

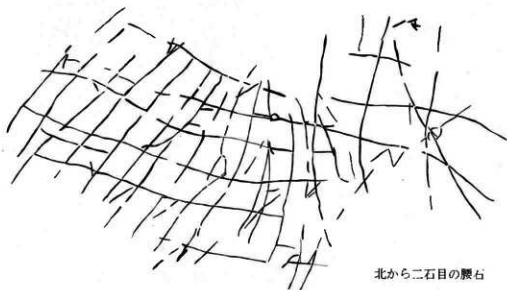


北端腰石南側

Fig. 8 玄室東側壁線刻画(1) (S=1/6)

先端がいずれも三又になるので断定はできないが、背に人物と思われる表現が見られるので馬ではないかと推定される。全長23cmを測る。その上部にも何か表現しているのであるが、不明である。

下段には二隻のゴンドラ型船が線刻されている。左側の船は全長25cm、両端を約5cm上方に上げる。船上には5・6体の人物が乗り、船体には斜線が施される。その左下に、人物か動物か不明な線刻が見られる。頭部左右を二本の角状に表現し、手足の先端を三又に表す。尾部から右上がりに延びる線が船の船体と重複しており、船と一緒に理解すべきもののなか。



南端腰石から
三段目石材



南端腰石から
二段目石材

Fig. 9 玄室東側壁線刻画(2) (S=1/6)

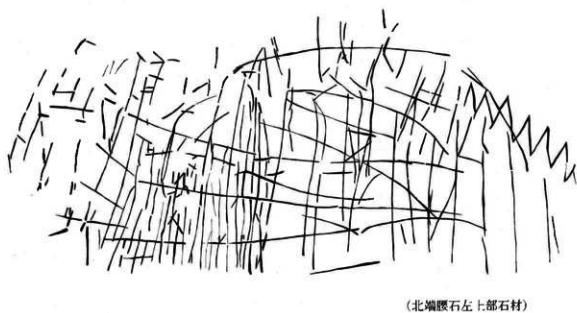
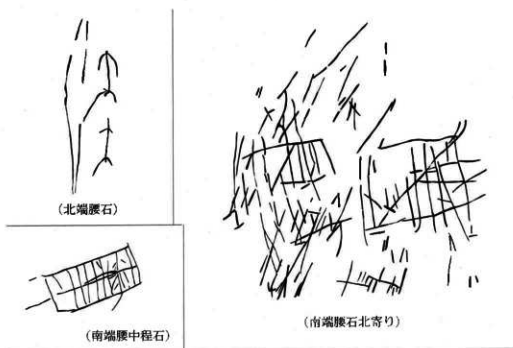


Fig.10 玄室西側壁線刻① (S=1/6)

右側の船は全長15cm、両端を3～4cm上方に上げる。船体の上に8本、下に15本の櫓を表現する。

北から二石目の腰石には、全体的に右下がりの斜格子紋様を刻む。縦45cm、横40cmの範囲に左下がりの13本、横7本で表現する。

南端腰石から二段目の線刻は何を表現したものかは不明であるが、樹木か木の葉であろうか。三段目の線刻は長径22cm、短径21cmの楕円形を刻むが、意味不明である。

(2)玄室西側壁 (Fig.10・11)

西側壁では、腰石2石・北側腰石左上部の石材・南側三段目の石材の4石に線刻画が見られる。

北端腰石には上下に二体の人物画が刻まれる。いずれも正面を描くが頭部の表現が明瞭でない。上部の人物画は右手・左足が、下部の人物画は左手・左足が長く表され、左側には縦線2本が刻まれる。

南端腰石には北寄りと中程にそれぞれ線刻画がある。北寄りのは格子紋様が2単位あると思われるが、横線がはっきりしない。中程のは右上がりの斜格子紋様で、四隅を意識した長方形を示す。右上がりの3本と左下がりの12本で構成され、4号墳の格子紋様全体の中でも特異な形態である。長辺14cm、短辺6cmを測る。

北端腰石上部の表面を鑿状工具で成形し中央部が内湾した大型石材全面には、格子紋様と右側上端に連続鋸歯紋様を刻む。格子紋様は右下がりの線は7本だが、縦線は左下端で密集しやや粗雑の感を受ける。

側壁南側三段目の大型石材にも、表面全体に斜格子紋様が刻まれる。右下がり・左下がり各16本で斜格子を構成し、格子単位の対角線状に縦線23本を刻む。

(3)羨道東側壁 (Fig.11)

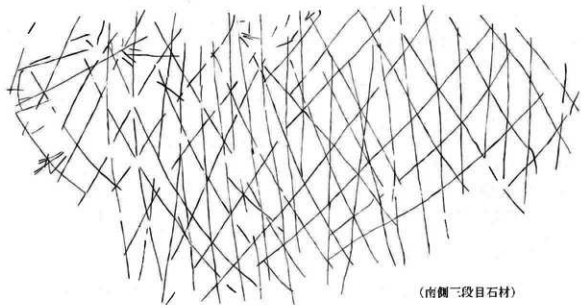
玄門側最上段の石材と南側三段目の石材にそれぞれ斜格子紋様を刻む。玄門側の斜格子紋様は、右下がり・左下がり各8本で構成され、ほぼ中央に右下がりの2本を刻む。なお、この石材は羨道天井石が南西に移動したことに伴い、南西側にずれている。

南側の斜格子紋様は、石材の表面が磨耗しており線刻の認めがたい部分があるが、縦線13本、横線7本で構成されると思われる。

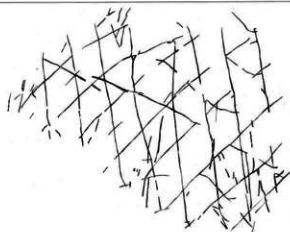
4. 墳丘及び墓石 (Fig.12)

(1)墳丘

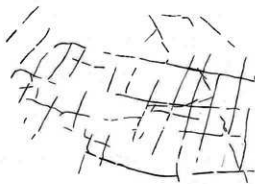
この古墳は東西径約12m、南北径は羨道部南端が削られているために不明であるが、墳丘南東部の等高線を延長すると約11mを測る円墳と考えられる。高さは現状では南東側で約3.5m、東側で約1.0m、北東側で約60cm、南西側で約3.1m、西側で約1.6mを測り、北側ではほとんど高低差が認められない。南側と北側の高低差は約3.5mを測る。



(南側三段目石材)



(羨道東側壁北)



(羨道東側壁南)

Fig.11 玄室西側壁線刻画(2)・羨道東側壁線刻画 (S=1/6)

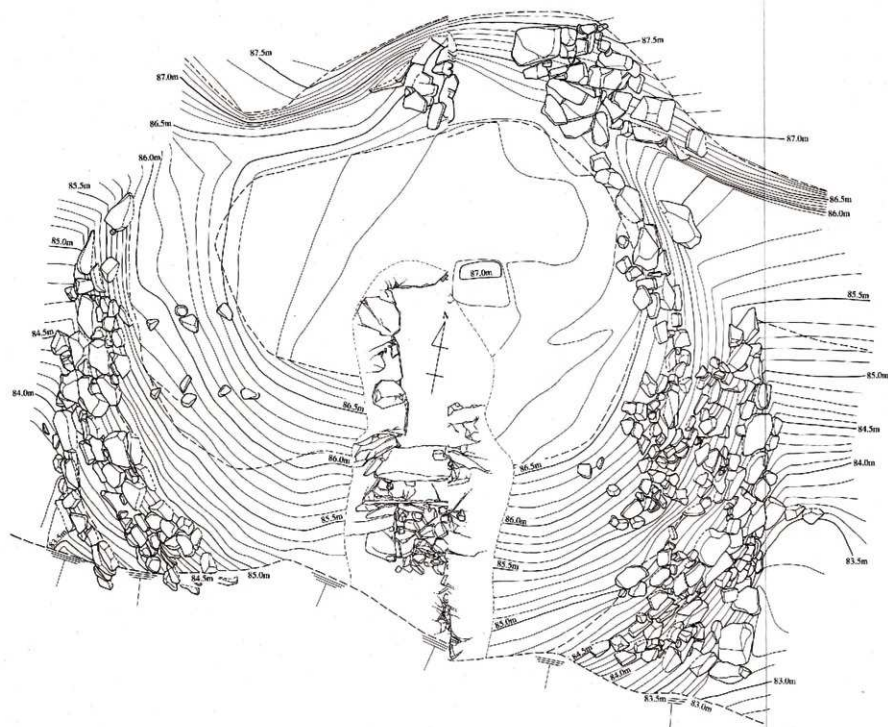


Fig.12 填丘・葦石実測図 (S=1/60)

墳丘勾配は、南東・東側裾部で34～37°、南西・西側裾部で33～35°を測る。

全体的に見ると、南斜面という立地条件と北側では岩盤が検出されるという自然的条件に左右されて、古墳の正面である南側を強く意識した築造であると考えられる。

(2) 葺石

古墳斜面には葺石が残存しているが、崩落部分も多く築造当時は斜面全体に施されていたと考えられる。葺石は表面のみが露出するように墳丘に埋め込まれている。大きさは一定しておらず、10～30cmの小型石材と50～100cmの大型石材を使用するが、大型石材を墳丘裾部に配置しようとした意図が窺える。作業工程を示すような縦位置の配列は認めがたく、全体的に粗雑の感を免れない。

5. 出土遺物

4号墳からの出土遺物は、玄室敷石上から須恵器高杯・提瓶各1個、武器8体、装身具10個、鉄片10数個と盗掘時の物と思われる土師器皿1個、玄室埋土から陶器鉢1個、墳丘南東裾部から須恵器器台片1個、それと墳丘北東部の北側からの流入土からの寛永通宝1枚がある。

(1) 土器 (Fig.13)

1・2はいずれも完形で、玄室南西隅部から出土した。1の提瓶は口頸部がくの字状に屈曲し、口径8.0～8.3cm、器高15.5cm、胴部径16.0cmを測る。口頸部は横ナデ調整で、胴部全体に回転カキ目調整を施す。2の高杯は坏部の歪みが甚だしく、坏部径約12.7cm、器高13.3cm、脚

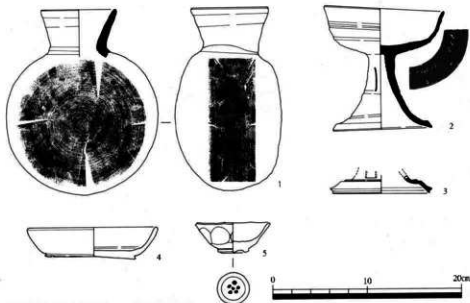


Fig.13 出土遺物実測図(1) (S=1/4)

径10.5cmを測る。口頸部は器厚が薄くわずかに外傾し、脚端部は三角状となる。坏部中程には3条の凹線を巡らし、底部外面には櫛書列点紋が施される。坏部底部内面はナデ調整、他は横ナデ調整である。脚部上方に縦方向のヘラ書き記号が1条ある。3は墳丘南東裾部から出土した器台片である。底径10.2cmを測り、幅1.0cmの透し穴がみられる。ラッパ状に開く底部端面は逆三角状となる。回転横ナデ調整だが、内面は器表が荒れている。4は屍床の西側仕切り石に接して出土した上師器皿である。復元口径13.9cm、器高3.4cm。糸切り底で、口径部は回転横ナデ調整、底部はナデ調整である。5は玄室土上から出土した李朝陶器で、口縁を六角となし外面を楕円形に八面削る。口径8.0cm、器高3.3cm。口縁部に白色釉がかかるが、全体に貫入が見られる。高台内に、焼成後に淡赤色の梅花紋を施す。

(2) 装身具 (Fig.14)

いずれも敷石上から出土したが、勾玉・耳環・管玉は玄室中央南側の40cm範囲に集中しており、銅釧のみがそこから南西約50cm離れて出土した。

1の銅釧は長径6.5cm、短径6.0cm、厚さ0.3cmを測る。断面外側が低い三角状を示す。2の耳環は長径3.1cm、短径2.9cm、厚さ0.8cmと肉厚である。3の石製勾玉は全長2.5cm、幅6mmを測る。4～10の碧玉製管玉は全長2.1～3.0cm、径0.8～1.0cmを測る。いずれも一方向からの穿孔である。管玉・勾玉は集中して出土していることから、一連の物として使用されたのではないだろう。

(3) 武器 (Fig.15)

武器としては、鉄刀片4本、圭頭太刀柄頭・賣金具・鞘口金具・鉄鎌片各1個がある。このうち鞘口金具については、遺存状態が悪く、図ができなかった。

1の圭頭太刀柄頭は木芯を圭頭に成形し、金銅製の薄い板を両側

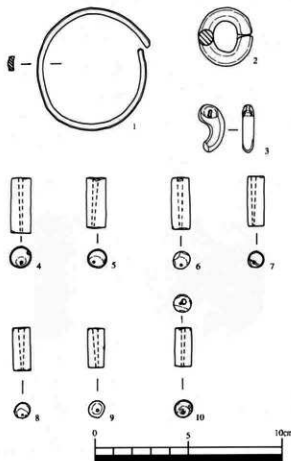


Fig.14 出土遺物実測図(2) (S=1/2)

面に張り、それを径7mmのピンで両側から固定し、側面を同じく金銅製の板で巻くものである。右側部分が変形・湾曲している。残存長6.2cm、厚さ2.4cm。片側のピンは外れており、同じ地点から出土した。2がそれであり、頭部径1.1cm、残存長1.2cm、金銅製である。3の太刀片は刃部が9.5cm残存し、金銅製の鞘口金具と鐙を装着する。身の断面は棟幅6mmの長三角形である。

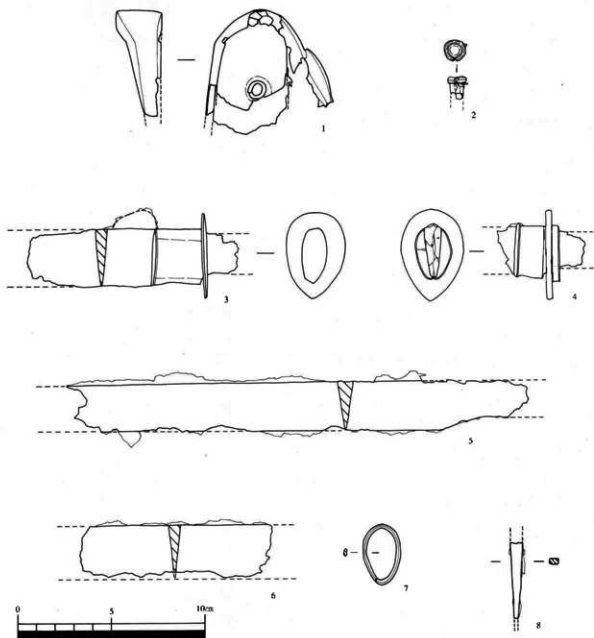


Fig. 15 出土遺物実測図(3)

る。鐙は下端が細くなる楕円形で長径4.5cm、短径3.1cm。

金銅部分全体に緑錆が出ている。4の太刀片は鞘口部分のみ残存

しており、残存長4.6cm。鐙と鞘口金具は金銅製で、鐙は下端が

細くなる楕円形、長径4.7cm、短径3.5cm。金銅部分全体に緑錆が

出ている。3、4の太刀片は、屍床の仕切り石南側の北東部で出

土した。5の鉄刀片は残存長24.5cm、茎部が少し残る。身の断面

は棟幅7mmの長三角形である。6は残存長10.1cm、断面は棟幅6

mmである。5・6の鉄刀片は玄室南西部の腰石と敷石の隙間に置

かれており、同地点で出土した高坏・提瓶とともに副葬当時の位

置を保っていたのであろうか。7の資金具は長径3.2cm、短径2.0cmを測り、下端につなぎ目が

認められる。8は鉄鎌の茎部分で残存長4.0cm、断面幅3mmである。

(4)銅銭 (Fig.16)

墳丘北東部の流入土除去中に出土した寛永通宝である。径2.2cm、中心に一辺6mmの方形透しがある。拓本で示す。



Fig.16 銅銭拓本
(S=1/1)

IV. まとめ

妻山古墳群4号墳の発掘調査では、当初の記録保存から現状保存へと変更したために、墳丘内にトレンチを設定しておらず、羨道の閉塞石も除去していない。そのために墳丘の構築状況、石室の裏込めの状態、墓壇の範囲や羨道側壁等の細部については、将来の調査を待たなければならない点が多い。また、白石町における古墳の発掘調査は今回が初めてということもあり、妻山古墳群中、なおかつ杵島山東部における古墳の歴史的位置付けなど、今後の調査の進展を待つ部分も多いと言わざるを得ないのが現状である。ただ、今回の調査で明らかになった点と若干の問題点を列記してみたい。

まず墳丘についてであるが、東西径12m、南北径は復元すると約11mを測る円墳である。南北の高低差が約3.5mもあり、南側を強く意識した築造となっている。墳丘の構築状況についての調査を実施しておらず詳細は不明であるが、墳丘北側に見られる岩盤についてはほとんど造作の手を加えていないこと、墳丘裾のラインが北側へ上昇していることなどから考えて、東に延びる尾根の南斜面という地形を利用した築造であったと推定される。

石室については、羨道南側が削られ天井石が欠失し、東側壁の一部が倒壊しているが、遺存状態は比較的良好である。玄門に立て掛けられた板石や閉塞石などは、追葬を前提とした群集墳における葬送儀礼を考察するうえでの貴重な資料となるものである。しかし、板石や閉塞石が築造当時のものか、追葬時の構築によるものなのかは、後で述べる線刻画とも関連して今後

検討していく課題の一つである。

石材は奥壁の1枚を最大として、東西側壁の腰石に大型石材を横位置に置き、上部は中型石材で構築し隙間に小型割石を充填し、持ち送りが見られる。天井石は、奥壁に残存していた1枚と玄室内に落下していた大型石材の存在から、復元すると3～4枚が架構されていたと考えられる。羨道については玄門側に大型石材1枚が残存していたのみで、不明な点が多いが、羨道全体に天井石が架構されていたと考えている。

床面敷石の南側が若干傾斜しているのは、玄室内の排水を考慮したものか。この点も、敷石を除去していないので、別に排水施設が存在するかどうかについても不明である。

石室に使用される石材は、墳丘北側で見られる岩盤と同じ物であり、また古墳周辺にも大型の石材が露頭していることから、比較的周辺地域から運搬したものであろう。比較的柔らかい石材であり、表面に鑿状工具で調整した痕跡が随所に見られる。

4号墳の横穴式石室を経してみると、九州型と畿内型の要素が見られる。まず両側壁の腰石に大型石材を使用しその上段は比較的中型の石材を使用する点は九州型であり、前壁部を成して玄室と羨道の天井石に段差がある点が畿内型である。玄門の閉塞方法については、板石を立て掛けるのは九州型であるが、小型石材を積み上げる点は畿内型の特徴を示す。4号墳の場合はまず板石で玄門部を閉塞し、更に羨道側に小型石材を積み上げ、その上に小型の板石を設置するという構造を示し、閉塞方法については九州型と畿内型の両方の特徴を示している。

4号墳を特徴づける線刻画は、玄室・羨道の11石計13ヶ所に記されている。いずれの線刻画にも後世の追刻と思われる刻みは少なく、線刻の内容も格子紋様を主体とする幾何学紋様であることから、線刻当時の姿を留めているものと考えられるが、全ての線刻画が一度に刻まれたものかどうかは考察を進める必要がある。つまり、最初に遺体が埋葬された時点で全てが刻まれたものか、或いは追葬がなされた時に新たに刻まれたものがないのかどうかである。線刻画を子細に見ると、いずれも金釘状の工具を使用して刻まれており、彫りは比較的浅い。その中で、奥壁西側に刻まれる斜格子紋様は他の線刻画と比較するとその彫りがやや深い。彫りの深さでは相違がみられるが、紋様自体はややくずれた斜格子紋様であり、奥壁東側に刻まれた格子紋様と差異は認められない。このように、線刻画のみでは施された時期の相違を推定するのはやや無理があるかもしれない。

副葬品についてみると、前述したように屍床内敷石上に12世紀代の土師器皿が置かれていたことから、その時期に盗掘を受けたものと考えられ、副葬品は玄室敷石上に散乱した状態で検出されている。副葬品からも追葬の有無を考えるのは難しいと言わざるを得ない。羨道の閉塞石を更に調査すれば、追葬の有無が判明するかもしれない。

古墳の築造年代は6世紀後半と考えられる。

線刻画の内容を分類すると、格子紋様・鋸歯紋様・方形紋様・円形紋様の幾何学紋様、ゴン

ドラ型船の器材紋様、人物・馬の人物鳥獣紋様の三種類がある。このほかに、木の葉と思われる紋様もある。刻まれた箇所との関係で見ると、東側壁北腰石のみ幾何学紋様・人物鳥獣紋様と器材紋様の三種類が刻まれ、その他の石材は一石一種類のみである。東側壁北腰石とはほぼ同規模の西側壁北腰石には小型人物紋様二体のみであり、この点からみると石材の大きさや紋様の種類・数との関連はあまり認められない。基本的には一石一種類と考えて良いと思われる。

さて、これらの線刻画は何を表したものであるのか。線刻画を「鎮魂のための素朴な絵である」とする説が一般的であろう^④。個々についてみると、船や馬は「死者の靈魂を運ぶ媒体」とされ、東側壁南腰石上部の紋様を木の葉とすれば、神木或いは霊木を代用するものであろうか。木の葉紋様については、九州では周防灘に面した福岡・大分両県に3例、香川県で2例・島根・鳥取両県に8例が知られており、九州では垂下型、山陰・瀬戸内では上向型に分類できるとい^⑤う。4号墳の例は垂下型で九州に見られる型と同一であるが、佐賀県下では本例のみで他に類似が見られないことから、紋様の特定を更に検討する必要がある。

器材紋様・人物鳥獣紋様については鎮魂を主たる目的としたものと理解していいのではないだろうか。格子紋様等の幾何学紋様については装飾性と呪術性^⑥とが考えられる。紋様が単純であるだけに、その理解に苦しむところである。羨道側壁にも格子紋様があることから、装飾性も考えられるが、石室正面の奥壁に格子紋様が東西両側に刻まれていることからすれば、呪術性が強いのではないか。つまり、死者の靈魂を乱すものの進入を防ぐ辟邪の思想が主ではないだろうか。総合的に考えれば、やはり鎮魂を目的とした線刻であると考えられるのではないだろうか。

白石町内で、他に線刻画を有する古墳は現在3例が知られる。妻山古墳群から南西にあたる湯崎古墳群の1例は林道工事中に発見されたもので詳細は不明であるが、斜格子紋様を有する石材が出土したとのことである^⑦。もう1例は2号墳の槨石に船の線刻があるということだが、現在はその槨石が折れて落下しており確認できない。この他に、同じ妻山古墳群に属する7号墳の平面T字型横穴式石室の南北側壁に斜格子紋様等が4～5ヶ所確認されている。今後、古墳の調査が進めば線刻画を有する例は増加するものと思われる。

以上、今回の調査で明らかになった点と若干の問題点を記したが、線刻画を有する古墳は杵島郡の有明町・北方町・白石町、多久市、小城町の佐賀県西部に集中する傾向にある^⑧。線刻画の内容も、人物・ゴンドラ型船も見られるが、大半は格子・斜格子紋様を主とした幾何学紋様であり、同じ思想・文化を有する地域、言い換えれば線刻画文化圏を形成すると考えられる。その中でも妻山古墳群4号墳の線刻画は、その内容・種類ともに多様なものであり、今後線刻画を考察するうえでの貴重な資料となるであろう。

(註)

①森貞次郎『装飾古墳』 教育社 1985年

②斎藤忠『壁画古墳の系譜』 学生社 1989年

③小田富士雄「福岡県・穴ヶ葉山古墳の線刻壁画」(『古文化談叢』第16集 九州古文化研究会 1986年)

④『白石町史』(1974年)に、斜格子紋様のある石材の写真が掲載されているが、その出土位置・石材の所在等は不明である。

⑤佐賀県立博物館の蒲原宏行氏からご教示いただいた。

⑥調査され、報告書等に記載されている古墳についてその文献を記す。

・龍王崎古墳群 6号墳—『龍王崎古墳群』佐賀県教育委員会 昭和43年

・永池古墳—木下之治「永池古墳」(『新郷土』昭和48年1月)

線刻画の施された板石は、現在佐賀県立博物館に保存されている。

・勇猛山古墳群 4・5号墳、勇猛寺古墳 1～3号石室—『勇猛山古墳群』佐賀県教育委員会 昭和42年

・山の上古墳群 ST014—『東多久バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』佐賀県教育委員会 1984年 ST014は現在、多久市歴史民俗資料館敷地内に移転保存されている。

・古賀山古墳群 1号墳—『牟田辺遺跡』多久市教育委員会 1975年

・牛尾山古墳群、米隈古墳、坂井古墳群 1号墳—木下巧「線刻文古墳考」2(『OGI NO REKISHI』第17号 昭和49年)

この他、多久市・小城町の線刻画を有する古墳については、多久市教育委員会西村隆司氏、小城町教育委員会古庄秀樹氏にそれぞれご教示いただいた。

圖 版



1. 古墳位置（大山岳より）



2. 墳丘東側（調査前）



3. 墳丘西側（調査前）



1. 墳丘全景（北より）



2. 墳丘東側墓石



3. 同上



1. 墳丘東側葺石



2. 同上



3. 墳丘北東側葺石



1. 墳丘西側葺石



2. 同上



3. 同上



1. 墳丘西側葺石



2. 墳丘北側岩盤（南より）



3. 墳丘北側岩盤（西より）



1. 石室上面（北より）



2. 奥壁（南より）



3. 屍床（南より）



1. 敷石（南より）



2. 玄門上部（玄室より）



3. 玄門下部（玄室より）



1. 玄室東側壁



2. 同上



3. 玄室西側壁



1. 玄室西側壁



2. 羨道（北より）



3. 玄門板石（南より）



1. 狭道東側壁（西より）



2. 墳丘南東裾
器台片出土状況（東より）



3. 高坏・提瓶出土状況（東より）



1. 鉄刀片2本出土状況（東より）



2. 銅劍出土状況（南より）



3. 碧玉製管玉・勾玉・耳環
出土状況（南より）



1. 金銅装主頭太刀柄頭出土状況
(南より)



2. 金銅装太刀片出土状況
(南より)



3. 金銅装太刀片(鐔部)出土状況
(北より)



1. 奥壁東側上位線刻画



2. 奥壁東側中位線刻画



3. 奥壁西側上位線刻画



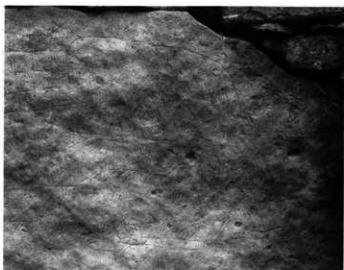
1. 奥壁西側下位線刻画



2. 玄室東側壁北腰石線刻画



3. 同上



1. 玄室東側壁北腰石線刻画



2. 同上



3. 同上



1. 玄室東側壁中腰石線刻画



2. 玄室東側壁南端二段目線刻画



3. 玄室東側壁南端三段目線刻画



1. 玄室西側壁北腰石線刻画



2. 玄室西側壁南腰石線刻画



3. 同上



1. 玄室西側壁北腰石上部石線刻画



2. 玄室西側壁南端三段日線刻画



3. 羨道東側壁北線刻画



1. 羨道東側壁南線刻画



2



3



4



2

2 (13-1)

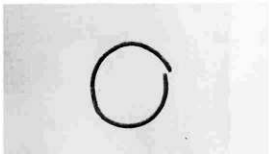
3 (13-2)

4 (13-3)

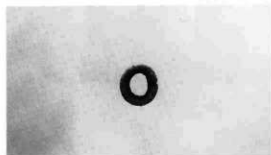
5 (13-4)



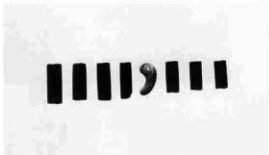
1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

- | | | | |
|----------|-------------|----------|-----------|
| 1 (13-5) | 4 (14-3~10) | 7 (15-3) | 10 (15-6) |
| 2 (14-1) | 5 (15-1) | 8 (15-4) | 11 (15-7) |
| 3 (14-2) | 6 (15-2) | 9 (15-5) | 12 (15-8) |

白石町文化財調査報告書第7集

妻山古墳群4号墳

平成6年3月31日

発行 佐賀県白石町教育委員会
佐賀県杵島郡白石町大字福田1809-1

印刷 鹿島印刷株式会社
佐賀県鹿島市古枝町249-3

